家庭での仏事

祥月命日…… 亡くなった方の忌日におつとめします

月忌（逮夜）… 亡くなった方の月命日におつとめします

年忌…… 一周忌、三回忌など定められた年の祥月命日などにおつとめします

家庭報恩講… 浄土真宗の宗祖である親鸞聖人のご命日の法要を家庭でおつとめします

入仏法要…… 新たにご本尊をお迎えするときにおつとめします

遷仏法要…… 引っ越しなどでお仏壇を移動させるときにおつとめします

竣工式（起工式・上棟式・定礎式・建碑式）
……それぞれのご縁にあわせておつとめします

この他、人生の節目に、お寺やご家庭で仏事を営むこともできますので、気軽にお寺に相談してください。

年忌一覧表

- 一周忌……亡くなって 1 年目におつとめ
- 三回忌……亡くなって 2 年目におつとめ
- 七回忌……亡くなって 6 年目におつとめ
- 十三回忌……亡くなって12年目におつとめ
- 十七回忌……亡くなって16年目におつとめ

以後、二十五回忌※、三十三回忌、五十回忌と続き、それ以降は五十年ごとにお勤めします。（地域や寺院により異なることもあります）
※二十五回忌を、二十三回忌と二十七回忌に分けておつとめすることもあります。

中陰はなくなった日から数えて七日目に営む法要が「初七日」。以後「二七日」「三七日」と七日ごとに満中陰（四十九日）まで法事をおつとめします。

法事 ☑ チェックリスト

【準備】

- □ お寺に、日時や会場の連絡
- □ ご家族やご親戚など、誰に参列していただくかの確認
- □ 過去帳（法名）の準備
- □ 蝋燭やお線香、お焼香などの準備
- □ お仏壇にお供えするお花やお供物などの準備
- □ お念珠やお経本、式章などの準備
- □ お布施の表書きは、「御布施」「御法礼」「志」など

【当日】

- □ 僧侶の合図に従って、お焼香をしてください
  焼香は押し頂かずに、1回のみ。終った後は合掌礼拝
- □ 僧侶の指示に従って、お経本を見ながら一緒にお勤めいたしましょう
- □ お勤めの前後には、僧侶にあわせて、「なもあみだぶつ」とお念仏を称え、合掌礼拝しましょう
- □ 亡き方を偲びながら、ご法話をお聴聞してください
- □ 亡き方の遺品やアルバムを用意し、思いをはせてみてください
- □ お斎（食事）をとりながら歓談するのもよいでしょう

月　　日は

さんの

祥月命日　／　忌です

ご法事を依頼する際はお寺までご連絡ください

編集：浄土真宗本願寺派総合研究所
重点プロジェクト推進室

第2版　2017.11.40,000

仏事奨励リーフレット

また あえる世界

浄土真宗本願寺派
（西本願寺）

ご法事は誕生日

あるおばあちゃんの十三回忌のお勤めをして、お斎（食事）をいただいていたときのことです。普段は顔を合わすことの少ない従兄弟たちに会って興奮したのでしょうか、幼稚園児くらいのお孫さんがはしゃいでいました。

そして、楽しそうに「お誕生日会みたい」とつぶやいたのです。

お父さんは「そうだね」といってその子を抱きしめ、お仏壇の脇に置かれた自分の母親の写真をじっと見つめていました。

お念仏をいただく人は、この世の縁の尽きるとき、お浄土へ生まれ仏さまとならせていただきます。ご命日は、亡き人がお浄土に生まれた日、仏さまとなられた誕生日なのです。

大切な人を亡くした悲しみは、決して消えることはないでしょう。

ですが、お浄土で仏となられた方は、いろいろなご縁をとおして私たちを仏前に誘ってくださっています。

それまで手を合わせたり、お念仏を称えることがなかった人も、ご法事を通してはじめて仏さまに思いを向けるきっかけになるかもしれません。

亡き人のご法事、仏さまとなられた誕生日に、ご縁のあった人と相集い、ともに手を合わせ、お念仏を申しましょう。

「われ称え　われ聞くなれど　南無阿弥陀　つれてゆくぞの親（仏）のよび声」（原口針水）

「仏ならこそ　そのままと　よんでくださる　このままを　このままと　しらぬゆえ　あちら　こちらと　迷いまわる」（佐々木ちよの）

またあえる世界

この世に生まれたものは、いつか必ず命を終えていかなければなりません。もし、死が全ての終わりであるならば、ただ虚しさだけが残るのではないでしょうか。

苦しみの一つに、愛別離苦（愛する人との別離の苦しみ）があります。この苦しみは、時に自分が死ぬことよりももっと辛いことかもしれません。私たちはそのような苦しみから離れられない世界にいるのです。

そのような苦しみから逃れられない存在を、必ず救うとはたらいてくださるのが阿弥陀さまです。お念仏のみ教えをよろこばれた亡き人は、阿弥陀さまのはたらきによりお浄土に往生し、仏さまとなります。そして、お浄土でじっとしておられるのではなく、手をかえ品をかえ、私たちに仏縁を結んでくださっているのです。

そのはたらきにより、私たちは「すべてのものを救う」という阿弥陀さまのお慈悲を聞き、信心をいただくことで、間違いなく往生する身にさだまります。そして、この世の縁のつきる時、先立たれた方のおられるお浄土に往生し、仏と成らせていただくのです。

ご法事は何のため？

ご法事の場では、先立たれた懐かしい方をご縁として、ご家族やご親戚、近隣の方々やご友人が集まられます。

先立たれた方を偲ぶ中で、私たちも終わりある人生を生きていることを知らされます。同時に、み教えを聞かせていただく中で、仏さまとなられた亡き方々も、阿弥陀さまと同じようにして、私たちを救い取ろうとはたらいていらっしゃることに気づかされます。

阿弥陀さまの限りないお徳を讃えるとともに、有縁の方がたとみ教えを聞き、安心をいただくことが、年忌を始めとするご法事の大切な意味なのです。